

江戸前アユだより

編集・発行
佐藤正康

埼玉県東部は低地に田んぼが広がるのどかな風景が見られる。フナやタナゴが棲むが、本調査の対象であるアユが好むような礫河川は流れていない。しかしここ数年、この田んぼの間をゆったりと流れる泥底の綾瀬川でアユの遡上が確認されている。今年は堰下の調査では確認できているものの、まだ堰上流の生息状況が明らかになっていない。

綾瀬川はさいたま市の一部分が筆者が所属している埼玉南部漁業協同組合の管轄である。

灌漑期が終わって水位が下がった10月。東北本線(宇都宮線)鉄橋下には音を立てて流れる瀬が出現していた。

綾瀬川はここだけ石があって瀬になっている。と言っても自然石ではなく、ガラやごみ交じりのいかにも厄介そうなところである。以前に一度だけ川沿いを歩いたことがあり、アユを確認するにはここがいいだろうと狙いをつけていた。綾瀬川のアユは小さいはずと踏んで投網は16節。引っかかる障害物が多いため、打ったあと網は引かず、魚が袋にかかるのを少し待つ。水深は足首程度で魚が泳いでいるのが見える。遊泳魚が網にあたる時らりと光る。魚がかかったらその場でたも網で受けて外していく。オイカワ、ボラ、ギンブナなどが捕れるが、肝心のアユがなかなか捕れない……。

川底に落ちている瓶を見るとアユ独特の筋状の食み跡があった。食み跡の大きさから推察されるアユの大きさは15cmくらいだろうか。瓶はいくつも落ちており、大体の瓶に食み跡がついていた。良い石がなく、瓶の表面についたコケを選択的に食べていると思える状況だった。しかし、筋まできれいに確認できる跡はほとんどなく、アユはもうこの場を離れてしまったとも考えられる。秋、産卵場所を探して移動する時期である。

瀬のすぐ上に打つとタイリクバラタナゴがたくさんかかった。中にはビワヒガイもいた。モツゴ、カマツカも少し。近くに径20cmほどのパイプが落ちていたのでひっくり返してみることに。中に泥が詰まっているようでとてつもなく重い。片方を土手にかけて、網で受けていたもう片側に手をかけてゆすると、網の中で何か大きな魚が暴れた。

上流は瀬になっていて、見慣れない水草が繁茂している。水草があると投網は効かない。瀬の下流は泥交じりの砂地でアユを狙うところがない。間隔をあけて同じ瀬に何回か網を打ってみたものの、この日はアユを確認することができなかった。

片づけている最中、足元で小さなカエルが跳ねた。これは例の奴では？と思い捕まえてみると案の定、最近増えているという外来のヌマガエルだった。本来関東地方には分布しない、別名イボガエル。この外来イボガエルは裏返すとお腹が白いのが在来イボガエル(ツチガエル・灰色)と見分けるポイントである。

低地を流れる砂泥河川に遡上したアユはどんな生活をしているのだろうか。今回意外なゴミがアユのえさ場になっていることが分かった。今後も地道に観察を続けていけば面白い発見がありそうだ。



「江戸前アユだより」は、江戸前アユの現状や今後のあれこれについて現場を見ながら考えてみよう、という情報交換を目的にしています。